

高麗末演福寺塔の重建をめぐる儒仏間の論争について（梁）

高麗末演福寺塔の重建をめぐる 儒仏間の論争について

梁 銀 容

高麗仏教の鎮護国家的性格は、寺塔の建立によって地徳を補い王業を繁栄させるといふ、裨補寺塔説からよく窺える。王室は仏教を国家の福田として、国を挙げて保護奨励したので、仏教は次第に隆盛を極めるようになった。一方、それは時代が下るにつれ、僧侶資質の底下やさまざまな社会問題を惹起し、麗末朱子学の伝来後、新進文士を中心に、こうした仏教に対する批判の声が高まってきた。

その契機が恭讓王二年（一三九〇）重建を始めた演福寺塔で、朝鮮の斥仏崇儒政策の前兆として注目される。そこで本稿では、裨補寺塔をめぐる朝廷論争の経過を辿り、麗末思潮の一端を考えて見たい。

開京（開城）にあった演福寺は、その初名を「広通普濟寺」、または「普濟寺」と略称され、俗称「唐寺」（「大寺」の意味）と呼ばれる禪門叢林であった。創建年代は明確でないが、顯宗（一〇一〇—一〇三二）以前と見るべく、権近撰「演福寺塔重創記」では、

①高麗王氏統合之初。率用無替以資密佑。置於中外置寺社。所謂裨補是已。演福寺：内鑿三池九井。其南又起五層之塔。応風水。〔『東文選』七八〕

と、建国初の風水挾地による裨補寺と見なされる。

さて、宋人徐兢撰「高麗図経」によると、この演福寺は、

②正殿極雄壯過於王宮。榜曰羅漢宝殿。中置金仙（釈迦）文殊普賢三像。旁列羅漢五百軀。：殿之西為浮屠五級。高逾二百尺。後為法堂。旁為僧居。可容百人相對。（卷一七）

と、西塔東殿の伽藍配置であった。金堂と塔を東西に並列する様式は、韓国仏教史上それまでなかった、特独な伽藍法である。もちろん舍利と仏像を均等視する信仰から来たのであろう。それが後の重建の時に、力学的均衡を重視する裨補原理に関わるところに興味深い。正殿は、王宮を上回るほどの壮大であったらしい。

「普濟寺」の代わりに「演福寺」の名が見当たるのは、忠肅王即位年（一三一三）の行幸記事からである。とすれば、塔の崩壊も蒙古による戦乱が再三重なった、寺名改称の前のことと推測される。当時、正殿には損壊のなかったやうで、改称の背景には、かかる巨刹を復興させ、王業を資福するという、王朝的意味が考えられる。裨補寺院演福寺の配置上では、正殿のみでは均衡を喪失し、それは直ちに国力の衰弱を象徴することになるからである。

以降、恭愍王（一三五二—一三七四）、狂僧長遠心によって、各々演福寺塔の重建が試図されたが、いずれも達成できなかった。同王代にまた、

③演福寺僧達孜。嘗以讖。說屯（？—一三七二）曰。寺有三池九井。三池澄淨扶蘇山映池心。則君臣心正致太平。九井者九竜在所。堙塞久。不可不開。將設会（文殊会）。屯令李云牧。役府兵。開三池九井。：〔『高麗史』一三三〕

とあり、根強く続けられたらしい。恭讓王二年二月に至り、

④演福寺僧法悦。說王曰。寺有五層塔殿及三池九井。頽廢已久。今復建塔殿。鑿池井。則国泰民安。王悦。以上護軍沈仁鳳。大

護軍權緩。為造成都監別監。嘗之。(同上、卷四五)

と、当寺僧の上疏によって重建がはじまる。同年七月には、近所の民家三十余所を撤去して三池九井の盆地を確保し、翌年三月には、布三千匹を施納している。

当時、王室の仏事は頻繁かつ豪奢を極め、国家の財政にも大きな影響を及ぼしていた。それが塔の工役を契機に、朝野に反撥を呼び起こしたのである。すなわち同年四月には、右代言柳廷顔が上疏し工役の停止を請うが、「不聴」となる。五月には、

⑤郎舍許庇等。上疏曰。…及創演福既廢之塔。臣民之望。多有所欠矣。釈氏之道。無父無君。戎裔之教。三代之盛。未所有也。

(同上)

⑥吏曹判書鄭摠。上書曰。…浮屠之教。敗倫滅理。…殿下。崇信太過。營構普濟之塔。而又多張梵采。殆無虛月。何為此無益之費。以取識者之讖乎。(同上)

と非難する。その状況は『三峯集』に、

⑦王欲營演福寺塔殿。令京畿楊広民。輸木五千株。牛尽斃。民甚怨之。公(鄭道伝)極言其害。(卷之八)

とあり、士林らの強力な態度が示唆される。その理論根拠は、まず生民の経営にあったが、史料⑥のように、儒教と対備して説く場合もある。因みに、この儒教と対備する思潮が、朝鮮朝鮮排仏思想の代表的著書と言える、鄭道伝撰「仏氏難弁」の底流になっている。

これに対して仏教側では、同年六月、

⑧前典医副正金瑬。上書曰。…此(仏教)三朝基業之根本也。…

上聖祖之弘願。重營仏寺。加給田丁。以興釈教。(同上)

と、仏土工役を勧める。それが高麗初期からの崇教観念、煥言すれ

高麗末演福寺塔の重建をめぐる儒仏間の論争について(梁)

ば史料③④で記された、裨補思想に基づいていることは言うまでもない。新羅国宝の一つであった皇竜寺九層塔が、外賊を鎮圧するという、護国原理と一致するものであり、王の「嘉納」は同様の流れに立った措置と言える。

同月には、芸文春秋館の金瑬弾劾や、成均生員朴礎らの仏教打破を請う上疏があったにもかかわらず、工役は再開され、一年後の同王四年五月に完了する。同年七月に高麗が減びるから、それは高麗最後の裨補工役であり、王朝の運命を急ぎ立てた結果になる。

ところで、注目されるのはこの演福寺が朝鮮に受け継がれるということである。すなわち同年七月初朝鮮建国の後にも、同塔の工役は続けられ一〇月に終る。翌年春に丹青が施される。そして四月に落成法会の文殊会が設けられるが、その塔が、

⑨(塔)上安仏舍利。中皮大藏(万軸)。下置毗盧肖像。所以資

福邦家。永利万世也。(演福寺塔重創記)

とあれば、高麗時代の裨補性格とまったく同様とわかる。高麗末、同寺復興をめぐる高調された斥仏思潮が、朝鮮に至って政策化されたが、一方、裨補原理も王室に受容されたことがわかる。それは裨補原理の土着された、高麗仏教の大きな流れであったと考える。

1 拙稿「高麗仏教の図識信仰受容について」『印仏』三〇—

二、一七〇頁。 2 李穀撰「演福寺鐘銘」『朝鮮金石總覽』

上、四九一頁)には「王城演福大叢林」とある。 3 高裕燮著

『松都の古蹟』八八頁。 4 『高麗史』卷三四。 5 「演福寺

塔重創記」。 678 『高麗史』卷四五。 9 『三国遺事』卷

第三。 10 前掲『高麗史』 11 『三峯集』卷之八。 12 前

掲『高麗史』 (仏教大学仏教文化研究所)